

特集 〈緑蔭図書紹介〉

動物たち、子どもたち

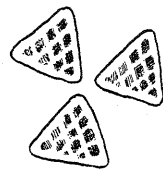
—あるいは「僕らはみんな生きている」—

柴坂 寿子

私は一度保育学会のシンポジウムで、話題提供者の一人として子どもの仲間関係について話したことがある。その折り、コメンテーターであった津守真氏が、私のことを「もともと動物の研究から来た人で……」というようなことを、嬉しそうに紹介してくださった。その楽しい調子を私自身も嬉しく思

う一方、心の中では小さなさざ波も立った。

というのは、今までの私の体験では、初めてお会いする保育者・研究者の方たちは、私のルーツが動物行動学・比較行動学であることが分かった途端、身を引くことが多いからである。「子どもたちを動物扱いするのか」という警戒のまなざしなのだろう



か。一挙に「遺伝決定論」「社会ダーウィニズム」といったおどろおどろしいレッテルが貼られた苦い体験もある。「動物の飼育を通して命の大切さの教育を」などとふだんはおっしゃってるのになあと、不思議にさえ思う。裏返せば、やっぱり多くの方たちにとって人間は高等で、他の動物は下等なものなのだろうか？ 人間は複雑で、他の動物は単純なものだろうか？ 人間だけが特別で他の動物は十把一絡げということなのだろうか？ 動物たちの姿を生で見たり、動物たちの生活が綴られた本を読んでいると、「生きている」ことに関して、人間だけが高等とか、複雑とか、特別とか、私にはとても思えないのだけれど。

『うちのカメ』（石川良輔、八坂書房、一九九四年）は、三十五年間人間と一緒に暮らしてきたカメの記録である。その中で一番印象的なのは、著者たちご夫婦にとってカメが大事な家族であるだけでは

なく、カメにとってもご夫婦が「大事な存在」らしいことである。石川氏が夕食を取っていると、カメは足元にまとわりついて膝に乗せて貰い、ソファに移るとカメもすぐそちらにやってくる。旅行からしばらくぶりで帰ってくるといつもよりしつこくまとわりついて、膝に乗せるといつまでもべたべたくっついていて、名前を呼べば瞬きしたり、振り向くようにもなったという。居眠りをしている石川氏のお腹の上でカメも寝ているスケッチには、なんだかほのぼのしてしまった。

『ラット一家と暮らしてみたら』（服部ゆう子、岩波書店、二〇〇〇年）では、人間と暮らすラットたちが、その子育ての様子を中心に描かれている。どのラットも巣作りが達者で、その巧妙さには感心させられる。その一方で性格はどのラットもとても个性的で、一匹一匹がそれぞれの名前で覚えてくるようだ。特に面白かったのは雄が子育てに関

わる様子が多様なことだ。雌に追い出されて子どもに近づけないような雄や、子どもには目もくれない雄もいれば、保父さん代わりをする雄もいる。なかでも父親ではない雄が子どもたちを世話するようになり、雌が事故で死んでからは母親代わりになったというエピソードでは雄のかがいしさが印象的である。十匹以上いる子どもたちが次から次に雄の腹の下に潜り込んでくると、雄は子どもたちを一生懸命嘗めてやる。子どもたちは雄の腹の皮や毛を乳首代わりにくわえている。やがて空腹に耐えられなくなった子どもたちがミルクの皿に移動すると、雄はほっとしたように自分の乱れた毛をグルーミングするのである。

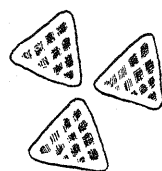
『森に生まれた愛の物語』（ジェーン・グドール

Ⅱ文 アラン・マークスⅡ絵、講談社、一九九八年）では、四十年近くアフリカのチンパンジーの観察研究を続けているジェーン・グドールがチンパン

ジーたちの思い出深いエピソードを語っている。その中で私が一番好きなのが、デイビッド老人の話だ。デイビッドを追っていたジェーンの前

で、デイビッドは警戒する様子もなく眠り始める。

自分は信頼されていると感動したジェーンが、やがて起きあがったデイビッドに、思わずアブラヤシの赤い実を渡そうとする。初め、デイビッドはそっぽを向く。ジェーンがなおも渡そうとすると、デイビッドは実を受け取り、ジェーンの手をしっかりと握って、ジェーンの目を覗き込み、手を離し、実を落とすという。ジェーンは「(私には) すぐに分りました。彼は私の贈り物は受け取らなかつたけれど、気持ちを受け取ってくれたのです」と書いている。この話を読んだとき、私は我が「同居人」だったハムスターを思い出した。最期の頃、餌が食べら



れなくなつて、私が無理に食べさせようとしたら、手を軽く噛んで拒んだ。巣箱に戻してやると、ねぐらに潜り込んで出てこなくなつたが、夜になつてひよこつと顔を出してこちらの顔を見ると、またすぐ引つ込んだ。そして次の日の朝、ねぐらの中で往生していた。不思議だつたけれど、あれは最期の覚悟を決めてのご挨拶だつたに違いないと思う。動物の擬人化とか、単純な動物の行動を複雑に説明しているとか言う人もいるだろう。でもジェーンに倣つて、「私には分かりました」と言つておこう。

『ことばをおぼえたチンパンジー』（松沢哲朗 文、藪内正幸 絵、福音館書店、一九八五年）では、京都大学霊長類研究所の有名チンパンジー、アイについて、アイとの実験を続けてきた松沢哲朗氏が語っている。アイはどれくらいもの名前を覚えられるのか、数が数えられるのか、といったテストを受けている。でもこうしたテストはあくまでも人間にとつ

て重要な能力についてのテストであり、それをチンパンジーがどれくらいできるのか、こうした点でどれくらい人間に近いのかというテストである。それができないことがチンパンジーが人間に劣っているということではないはずだ。松沢氏は次のように書いている。「……でも、物の名前や色の名前に比べると、数はちよつと難しい。……アフリカの森で暮らすチンパンジーには細かい数などどうでもよいのかもしれない。木になつている実が大好きなイチジクの実なのか違うのか？ イチジクだとしてそれが赤くて熟れて食べ頃なのかまだ青いのか？ 物の形や色を見分けることは、チンパンジーにとつて、とても大切です。でも実の数が三個か四個かというのはきつとどうでもいいことなのでしょう。いつもイチジクはたくさんの実を結ぶのですから」。この本の最後は、夕日に照らされて、手をつないだ松沢氏とアイの二つの影が伸びている静かな風景であ

る。松沢氏は「こんな時、決して人だけが特別な動物ではないのだなあと思います」と綴っている。

私はこうした動物たちの記録を読んだり、ご近所の犬や猫、小鳥に、ちよつと遊んで貰つたりしている時が一番人間らしい気持ちになる。人間らしいと

いうより生きものらしいという方が適切かもしれない。「僕らはみんな生きている」。動物たちの間で心地よいのも、子どもたちの間で心地よいのも、私にとっては等しくそういうことなのだと思う。

(お茶の水女子大学)

夏休みに旅を思う

金山 優美

夏休みがやってくる。この時期、まとまった休みが取れ、旅行を計画されている方も多いことと思う。

そんなわけで私がご紹介するのは、元日本航空のパイロットである田口美貴夫氏書いた『機長の一日』、『機長の七百万マイル』(講談社)と